普段着のわたしたち

八重のドクダミだそうです。

お参り先の奥様が嬉々として、「珍しいでしょ。ぜひお持ちになって。根がついたままだからお庭で増やして！」と下さいました。

う～ん、珍しいですけど…所謂ドクダミですよね。地植えなんかしちゃったら確実に増えるので嫌です。境内にドクダミがはびこっている景色をどうお思いになりますか？

ですが、せっかくのお気持ちなので、植木鉢で育てることにします。広がらなければヨシとしましょうか。　訶梨帝母

午後４時に、本堂の戸締りをする時に「法螺貝」を吹く練習をする。山で修験者が吹く凛々しい音ではない。毎日吹くことが肝心だと思っているが一向に上達しない。私の法螺貝の音が聞こえてくると、近所の

犬が夕方の散歩に行きたがらなくなるらしい。近所の工場で働く人も就業終了時間１時間前にして労働意欲を失くす。屋根の棟に止まっているカラスも転落しそうになる。私の法螺貝の音を聞くと極度の脱力感に襲われるらしい。確かにスカスカの情けない音だ。最近ではその光景を見るのが快感となり、更に磨きがかかってきている。　俊徳丸

皆様観ておられますかな？もちろん『鎌倉殿の13人』です。

写真は義経公のセリフ「この先、私は誰と戦えば良いのか」ですが、この一言に源平合戦が終わるということがどういうことなのかが示されていますね。法然上人の弟子として第二の人生を生きることが出来た熊谷次郎直実ですが、彼もまたどうしたらよいのかと悩んだのでしょう。三谷幸喜脚本としては最高の出来だと確信している大河です。いよいよ夏ですから前半のクライマックスです。　征阿

先月に引き続き、今月もバーゲンにかけつけました。大人の脳が元気になる、という文句に惹かれて購入にいたりましたが、小学生の頃にタイムスリップして楽しんでおります。倅に出来上がった形を見せれば、「お星さま～」と言って応えてくれます。見せられる側になることを楽しみに励んでおります。　やっさん

久し振りに小説を買いました。越後長岡藩の一藩士であった河合継之助は徳川幕府の崩壊を見通し、家老に抜擢されて藩政改革を行うも、北越戦争で壮烈に散る。混沌の世だから読むべし。　迷走ボー

ケガの功名 ～思いを言葉に～

痛い話である。

右手親指の第一関節辺りをノコギリで切ったのだ。何といってもギザギザの歯で切った訳であるから、ズタズタという言葉が似合う有様であった。

直後、私は慌てて傷口を流水で洗い、しばらく物思いに耽った。何を一心に考え込んだのかというと、どうしたら病院に行かなくて済むか、である。元来、病院は好かない。

しかし、無理であった。己の体ながら、切り刻まれた肉片や皮膚が、どの部分だか見当がつかない。何より、血が一向に止まらなかった。私は左手に何枚も重ねたティッシュを持って傷口を包み、力一杯に握り締めながら病院へと向かった。

結果、四針縫うこととなり、二週間程ではあったが利き手が満足に使えなくなった。

痛い話は以上である。

怪我をしてからは、日常であった生活が限定されたものとなった。親指とはよく言ったもので、つかむ、つまむ、といった動作が出来ない。佛さまに御火を上げるのも、御水を供えるのも、御香を焚くことすら一苦労であった。水に触れることもままならず、手洗いや入浴、歯磨きが十分に出来ない。着替えも出来ない。掃除も出来ない。家事も出来ない…挙げ出したら切りがないほど出来ないことが増えた。利き手ではない左手ではぎこちなく、我が手ながらどうも芳しくないのである。

傷が癒えるまで社会が停まってくれる訳ではないから、毎日の務めはこなさなければならない。当然、私が出来ないことは全て家内にお願いすることになる。私は出来ないことが増えた代わりに、「ありがとう」と素朴な気持ちで口にすることが増えた。

すると、どうだろう。感謝の言葉を家内に面と向かって伝えるようになってから、自然と互いに笑顔が増えてきたのである。

これまで、食事の支度から洗濯、家事全般を率先して行ってくれる家内に、感謝の心を持ち合わせていなかった訳ではない。気持ちさえあれば、その思いを口にしなくてもよいと高を括っていた訳でもないが、言葉の発達が著しい二歳半の倅まで私達の真似をしてか「ありがとう」と笑顔で何度も口にし始めた時、以前にはなかった光が家の中に差し始めた。家庭内が明るくなってきたのである。

振り返れば、怪我をした場所はお稲荷様の神域にある木の枝を払おうとした矢先であった。はじめは罰でも当たったかと思っていたが、傷も快方に向かう今となっては、また違った思いを抱く。当たり前だと思っていた普段の生活が如何に尊く、有り難いものであるかを深く思い知った。そして何より、明るい言葉を口にすることの大切さを改めて学んだ。

言葉が生活を作る、これは生命を司るお稲荷様から教えられたことだと思っている。

ふと思う。あの時、怪我をしなかったら…私は、今の心境に達していただろうか。家庭は、今のように明るかっただろうか。家族は、今のような笑顔を見せてくれていただろうか。

しかしながら、もう痛い思いは御免である。

やっさん

こもりうた90

酷暑が割いた老夫婦のお話

穏やかな笑顔と柔らかな声、性格は慎ましく、お茶を淹れるのがとても上手な嫗あり。亭主関白の翁と二人で住んでいましたとさ。

一昨年の七月のある日。それはそれは暑い日の夕刻だったそうな。八十路の彼女は突然「もう貴方とは暮らせません」と夫に宣言。家出をしました。

呆気にとられたのは息子、娘、孫たち。「いやいや、六十余年も経って何をか言わんや。お父さんが困るよ。食事の世話やら云々」。そんな事は百も承知で家出した彼女。本気。皆が初めて「意外と頑固」と気付いたそうです。やがて息子さん達もその意を汲み取り、ならばと母に住まいを与え、置き去りにされた父には毎日食事を運び、親族全面協力のもと、老夫婦の別居生活が始まりました。

家出の原因は、長い時間ほんの少しずつ、静かに降り積もった怒りと不満。といっても、この年代の方々は「許容」という名の器が大きく頑丈。普通ならそのまま偕老同穴を成就されたことでしょう。ところが、コロナ自粛生活の最中、ある日の夕刻の暑さが、彼女に引鉄を引かせました。

「殿様気質の夫」は、日課だったカラオケ喫茶が休店で家に引きこもり。元来のわがままっぷりにターボで拍車がかかりました。

「夫に仕えてきた妻」は、定期的に出かける習い事等が全てお休み。二人で引きこもる生活は、うんざりするほど長くしんどい時間だったそうです。

さて、そんな別居生活も一年を過ぎた頃、子らのサポートを受けながら、自由に気ままに呑み明かし飽食の限りを尽くした夫は、持病の悪化と認知症が進んで入院。そのまま数ヶ月後に他界。亡くなる少し前に、彼女は息子さんに連れられ病院へ面会に行ったそうです。意識がやや薄れがちな状態でも、長年連れ添った妻の顔を見ると

「おお、久しいな。膝の調子（彼女の持病）はどうだ」とおっしゃったとか。

「はいはい、随分いいですよ。お父さんも思ったより顔色がいいですね」と最期の会話をされたそう。彼女は、六十数年で初めていたわりの言葉を夫から聞いて、憑きモノが落ちたようにわだかまりが解け、仲直りをして、旅立ちを見送ったという顛末。

現在、お佛壇に美味しいお茶をお供えし、日々夫を偲ぶ彼女。とてもお元気で、楽しそうに思い出話をなさいます。一年ちょっとのお騒がせはありましたが、諍い果てての契りだったと納得のご様子。ただ、

「あの暑い夕刻の西日が私をおかしくした」と繰り返し言ってみえます。きっとそれは逢魔時（おうまがとき）、暮れ六つ。

さあ７月、今年も暑くなるでしょう。皆様ご用心ご用心。

訶梨帝母

たまごチャーハンの日

先日の晩御飯の時、長男が、「餃子の王将で裏メニューの天津チャーハンを食べたことがある」と言っていた。その時ふと気が付いたことがある。私は生まれて60数年、「天津飯」を一度も食べたことがないのだ。翌日の昼、長男をつれて某所へ行き天津飯を食べた。日本が世界に誇る偉大な発明品カニかまぼこと、卵とのシンプルな具材に甘酸っぱい餡が優しく覆いかぶさっている日本人好みの丼もの。天津飯は日本で発案され、中国のメニューにはない。

さて、11月25日、アメリカでは「感謝祭」を祝うのだけど、同日、中国においても「卵チャーハンの日」という祝日があるそうだ。ただし、公の祝日ではなく、「影」の祝日みたいなものだそうな。もちろん、歴史の教科書には掲載されていない。

大東亜戦争終戦後、1950年、朝鮮半島で戦争が始まった。事実上、アメリカ(米)とソ連の戦争だが、(南)大韓民国と(北)朝鮮民主主義人民共和国との戦争で、途中から泥沼化して、3年後、「38度線」で休戦となり、その状態は現在も続いている。開戦当初は圧倒的に北の勢力が優勢で、南はどんどん後退しつつあった。南は米国に援助を頼み参戦した。すると、中国の毛沢東が独断専行で北に加わり参戦することになった。毛沢東の長男、毛岸英を自分の後継者にするため、この戦争で大手柄を立てさせるために参戦したと言われている。独裁者として君臨するためには「手柄」が必要で、現在の周近平が台湾に侵攻しようとしているのも同じ理由であろう。毛岸英には優秀な参謀が４人ついて最前線にいた。よくありがちなダメ息子で、軍隊にいながら毎日寝坊して起きてこないという体たらく。それに比べ動員させられた一般兵士は、防寒着が不足し、凍ったジャガイモをかじって飢えをしのいでいた。戦況は米軍の最新鋭の武器で北を押し返していたのだが、その武器で撃っても、撃っても中国軍の兵士がどんどん最前線に出て来て、逆に米軍兵士は恐怖を覚えたそうだ。独裁者の息子の手柄のために飢えと寒さの中でどれだけ多くの人が犠牲になったかということだ。11月25日の早朝、米軍の偵察機が駐屯地上空を低空で飛んで行き、すぐに避難命令が出て一般兵士は退去した。しかし、毛岸英だけは相変わらず朝遅く起きて来て、誰もいないので自ら調理小屋に行き、高価な卵でチャーハンの朝食を作ったそうだ。その際に小屋から出ていた煙が目印となり、米軍機からナパーム弾が投下されあっけなく戦死した。

この卵チャーハンの話は、毛沢東の後継者が間抜けな戦死をした話が滑稽に作られたのだと思う。しかし中共にすれば打ち消したい噂話でもある。その後、1966年から1977年まで「文化大革命」の暗黒の時代が訪れる。この10年間で更にどれほど多くの人が殺されたか。私はちょうど高校生で、毛沢東かぶれの先生がいた。当時、どこの公立学校にも一人ぐらいはいたのではないか。私は高校卒業して3年後に北京を旅行した。人民服を着た莫大な数の人が無言で誰とも目合わせることなく歩いていた。文化大革命が終わって3年目の年。まだご存命ならば、先生は卵チャーハン、私は天津飯で食事をし、話しをしてみたい。

俊徳丸

『私説法然伝』（８９）

助けてほしい④

先月号では法然上人の弟子になる武者・熊谷次郎直実について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【一の谷の戦い、源平合戦最大級の合戦であるが、その全体像は実はあまり知られていない。義経の逆落としの印象が強すぎるせいだろう。この戦いの全体像は、西日本で数万騎まで盛り返した平家軍と鎌倉方の本体源範頼軍五万六千騎と源義経軍一万騎が平家の本拠地である福原の地でぶつかり合った戦いである。一の谷の戦いとは、福原の地の一部の地名であり、実際にはもっと広範囲で合戦が行われた。だが源義経という日本戦史に残る「偉業」を達成した男の影響度の大きさによって一の谷の戦い、一の谷の合戦と後年呼ばれる事になるわけである。そして何より恐ろしいのが、義経は七十騎あまりの精鋭の中の精鋭で平家方の大軍勢を急襲した事である。これもまた諸説あり、いわゆる「鵯越」伝説などもあるが、とにもかくにも「逆落とし」という軍馬にまたがり急な斜面、おおよそ馬が降りられるようなところではない山からの敵部隊への奇襲作戦を実際に行ったのは、ほぼ間違いないのである。そして熊谷次郎直実という男はその中にいて、さらにその中の先駆けとして平家軍へ突撃したのである。そしてその結果、平家軍は混乱しながらも一騎駆けの直実は敵に囲まれてしまい、一歩間違えれば確実に討ち取られていたという。直実とは、まさに坂東武者そのものであり、戦ばかりの人生を歩んできた歴戦の強者であり、戦闘のプロフェッショナルである。

合戦は平家方が海へと逃れる形で終わる。平家は強力な水軍を持って、瀬戸内海から九州までを支配していた。逃げるのも当然海である。直実は敵、つまり「首級」を求めて馬を海まで進めた。そこで遭遇したのが平敦盛、若干十七歳ほどの若武者である。若武者というよりは、まさに平家の公達という風貌であり、美しかった。そして平家の公達として、実に堂々としていた。その敦盛を馬から引きずり降ろし、組み敷いて首を切り落とさんとするその瞬間に直実は敦盛の風貌にハッと息を飲み固まった。自分の息子と同じぐらい年齢の若者を殺す事をためらってしまったのである。思わず助けたいと思ってしまった。我が息子が戦の中で小傷を負っただけで心配になるのに、この若者を討ち取ったら、この若者の親はどれだけ悲しむのであろうか、そんな心の葛藤が直実の中で巻き起こってしまった。あの直実、義経軍という最前線の中でさらに先駆けをする程の男がそう思ってしまったのである。だが逃してもいずれ背後から迫る味方の軍勢に追いつかれるのは間違い無い。敦盛に泣きながら必ず供養もすると伝えて討ち取った。

直実はよほどこれが堪えたのだろう。歴戦の強者が戦場でさめざめと泣いたと言う。敦盛の腰に一つの小笛があるのを直実は見つけた。昨夜直実が聞いた笛の音色はこの若者の奏でるものであった。この笛の名を「小枝（さえだ）」と言う。】以下次号に続く（征阿）

Incubator project

気づくのが遅くて夢物語に終わってしまう計画をかいつまんでご説明します。気楽に読み進めてください。

インキュベーターとは、新生児を育てる保育器の意。 そこから転じて、創造性に富んだ技術、経営ノウハウ等を持つベンチャー企業に、経営・資金調達など、企業運営に必要なビジネス・技術サービスへの橋渡しを行う組織を指します。

ローテクの最たる組織であるお寺で、ハイテク企業を育てようという計画です。

田舎の小さなお寺はやり繰りが大変です。ただ、境内地にスペースの余裕があります。ここへガレージと寝泊りできる小部屋を１つ建てて企業を志す若者に提供するのです。

条件は１つ、お寺の弟子になって佛教の勉強をしてもらうことです。修行者の道場には固定資産税が免除されます。

Apple や Microsoft という世界的企業もスティーブ・ジョブズやビル・ゲイツが自宅のガレージで研究を始めたのがスタートです。

研究者が開発中はお寺の仕事を手伝ってもらって、後継住職候補として育成します。お寺の生産性が上がれば、経費はもちろん、上手くいけば副住職としての給料も払えます。

研究が成功して、製品やサービスの商品化の段階にきたとしましょう。宗教法人には 33 の収益事業が法的に認められています。「寺院規則」（会社でいう定款）に１行追加すれば大抵の分野に進出できるのです。（農業以外は）事業が軌道に乗るまでは宗教法人の収益事業の形をとり初期投資を抑えます。

同時に、お寺の無形の信用を借りるのです。「お坊さんは嘘をつかないだろう」「お寺が間違ったことをしないだろう」そう信じてくださる方はまだ大勢おられます。

いよいよスピンアウトして株式会社設立の段階に達したとします。最初の資金集めが難しそうですが、お寺には代々の檀家さんから頂戴した永代供養料が銀行の定期預金の形で塩漬けにされています。檀家さんの了解をえて借りるのです。その上に出資者を募れば設立資金集めの可能性はあります。

当山の周囲には耕作を放棄して荒地になっている土地が幾らでもあります。事務所や工場を建てて、地元の人々を雇用すれば地域経済に貢献できます。

リーダーに最も必要な企業哲学は佛教の教えをそのまま取り入れれば宜しい。松下幸之助さんや稲森和夫さんなど数え上げればきりがないほど。

社長としてお寺を離れる前に、弟子が次の弟子を育成しておけば、お寺の後継者に不足することはありません。

もし起業できなければ？　起業家的行動能力を備えた住職として跡を継いでもらえば宜しいのです。

迷走ボー